

横浜市磯子区の完新統から産出した イノシシ頭骨化石について

大島 光春

Mitsuharu OSHIMA: A Fossil Skull of Wild Boar
(*Sus*; Mammalia, Artiodactyla) from Holocene,
at Isogo-ku, Yokohama.

はじめに

神奈川県産のイノシシ化石は報告例が少なく、頭蓋骨がほぼ完全な形で産出した例は、久里浜の完新統産 (SHIKAMA & HASEGAWA, 1965) のみである。本稿では、完新統桜木町層から産出した、イノシシ頭蓋骨化石をニホンイノシシと同定し、記載した。

本稿をまとめるにあたり、横須賀市自然博物館の蟹江康光氏には、比較のために久里浜産のイノシシ化石を見せていただいた。神奈川県立博物館の松島義章博士には、本標本の産出地および産出層に関する情報を提供していただいた。記して感謝いたします。

ORDER: ARTIODACTYLA

SUBORDER: SUINA

FAMILY: SUIDAE

GENUS: *SUS* LINNAEUS, 1758

Sus scrofa leucomystax TEMMINCK, 1842

原記載 : TEMMINCK, 1842, *Siebold's Fauna Japon.*, *Mamm.* p. 6.

標 本

神奈川県立博物館標本番号 KPMG6468
(イノシシ頭蓋骨化石)

産出状況

採集年月日 : 1976年12月20日

採集位置 : 横浜市磯子区磯子町金蔵院山門前

35° 24' 21" N, 139° 37' 24" E (図1)

標高 : 0.3~0.4メートル

産出層 : 完新統桜木町層

岩質 : シルト質泥岩

本地点は厚い泥岩層の発達する沖積低地と、その背後の台地との境界付近に位置し、泥岩層中には台地を

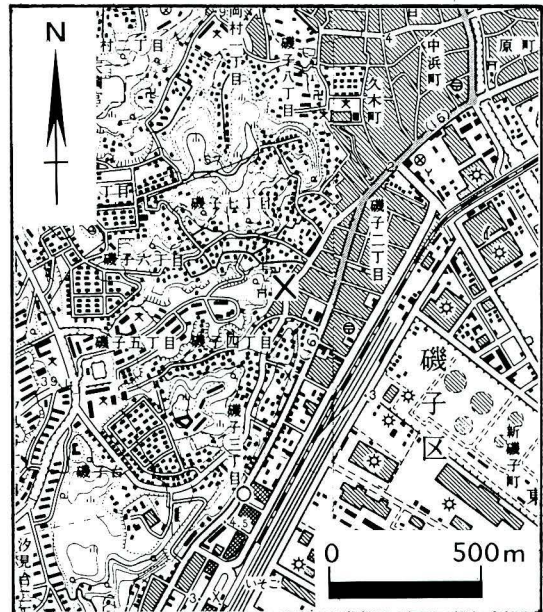


図1. 産出地位置図.

(国土地理院1:25000地形図, 戸塚, 本牧より作成.)

構成する上総層群のシルト岩礫を頻繁に含む。

年代 : 本標本の産出層準の年代は不明であるが、約3メートル下方の、標高-2.3メートルから産出したイタボガキの¹⁴C年代測定値は、6090±100y. B. P. (N-2847)である(松島, 1979)。

共産化石 : カガミガイ、ヒメシラトリ

記 載 (図2, 3)

保存状態は良く、若干背腹方向に圧縮され潰れているが、大きな変形、破壊は受けていない。失われているのは、吻部の左右鼻骨および右切歯骨と、左右の頬骨弓後部、後頭顆付近の4箇所である。

歯列のうち、残っているのは右がC(歯槽中)、P¹-

M³で、左がI¹、I²⁻³の歯根、P¹-M³である。ただし、左右のP¹⁻²、右のP³および左右のM¹にはエナメル質が残っていない。さらに、左のP³の舌側、左右のM²の近心側も壊れている。左右の頬骨がほぼ同じように壊れている。

鼻骨があまり丸みを帯びず、上顎骨との縫合線付近が角張っている。前頭骨は鼻骨の後方から直線的に幅が広がる。眼窩上溝は浅くはつきりしない。環状縫合はほぼ完全に癒合している。頭頂骨の側頭線は顕著であるがエッジは鋭くはなく、やや丸みを帯びている。左右の側頭線の間は狭く、項稜の直前でややきつく曲がる。項稜は標準的な大きさで、あまり湾曲せず、左右の端は薄くなって側方に張り出している。上顎骨から頬骨弓への張り出しは、やや前方からではあるが、標準的といえる程度である。犬歯の付け根の翼状の突起も、成獣のオスでは標準的な大きさといえる。上顎骨は高さがやや高く、犬歯窩はやや浅い。涙骨は上底が長い台形のような形である。眼窩下孔は大きく、D型をしている。またその後縁は、上顎骨口蓋突起に囲まれている。眼窩の腹側前方のくぼみはやや深い。口蓋裂は大きく、左右の口蓋裂を隔てる骨は薄い。

歯は、M³のタロンがやや発達している。

比 較

現生のニホンイノシシ *S. scrofa leucomystax* 1点、化石イノシシ1点と比較した。計測は、図4に示したようにDERIESCH(1976)に従い、計測値は表1に示した。

現生ニホンイノシシはM³が萌出した、長野県産のオスである。現生標本に対する磯子標本の相違点をあげると、①切歯骨が膨らんでいる、②眼窩上溝浅い、③頬骨弓が張り出しているなどの点である。しかし、両者の差異は非常に小さく、磯子標本は現生ニホンイノシシの個体変異の範囲内に入ると思われる。

化石は産出地が磯子と近く、約8000年前(蟹江・木越, 1986; Gak-12399a, 8250±170y. B. P.; Gak-12399b, 7770±120y. B. P.)と年代も近いので、横須賀市の久里浜から報告されている標本(SHIKAMA & HASEGAWA, 1965; *S. cf. lydekkeri*: YCM. GP92)と比較した。しかし、磯子標本がオスでM³が咬耗しているのに対して、久里浜標本はメスでM³が萌出していない点を考慮しなければならない。全体の印象は、久里浜標本がなめらかで華奢なのに対して、磯子標本はごつごつしてがっしりしている。

部位番号	磯子標本♂	久里浜標本♀	現生(長野)♂
1	(367)	(330)	351.1
5	(90)		99.7
6		44.6	50.6
7	(261)		263.0
9	184.5	167.9	199.0
10	(183)		187.8
11	138.1	131.0	150.2
12	(232)		
15a	(131)	115.0	140.0
16		80.6	83.0
17	(222)		224.5
18	(213)		215.8
19	84.8	77.2	76.8
20	(145)		149.9
21	56.8	35.4	63.0
22	35.8	27.4	
23	(130)		142.1
24	42.0	46.7	44.4
25	123.0	(94)	121.2
26	49.1	44.5	49.9
27	122.4	92.4	118.4
27a	113.1	83.5	112.1
28	74.75		71.4
29a	38.0	39.8	40.3
30	36.7		35.4
31	22.5		22.2
32	32.0	15.2	38.2
33	124.5	110.0	117.9
36		23.7	22.8
37		22.9	22.3
38	75.0		84.0
39	59.4	30.4	67.4
41	105.4	99.6	
42	39.8	33.9	38.6
43		140.6	153.7
44	82.1	69.0	75.9
45		97.6	109.5

表1. 頭蓋骨の計測値(mm).

(部位番号は図4を参照、括弧内は推定値.)

以下、久里浜標本に対する磯子標本の相違点を挙げると、①頬骨弓が大きく頑丈、②犬歯窩が浅い、③左右の側頭線の幅が頭頂部で狭い、④上顎骨が高い、⑤眼窩上溝が浅い、⑥後頭部のオーバーハングが緩い、⑦口蓋底が幅広い、⑧口蓋口がやや後方にある、⑨臼歯の幅が広いなどである。

しかし、これらの相違点は、性差や年齢差を考慮すれば著しいものではない。

次に類似点を挙げると、①頬骨弓の側方への張り出し方、②背側から見たときの切歯骨の膨らみ具合などである。

結 論

以上の比較の結論として、磯子標本と現生標本はほ

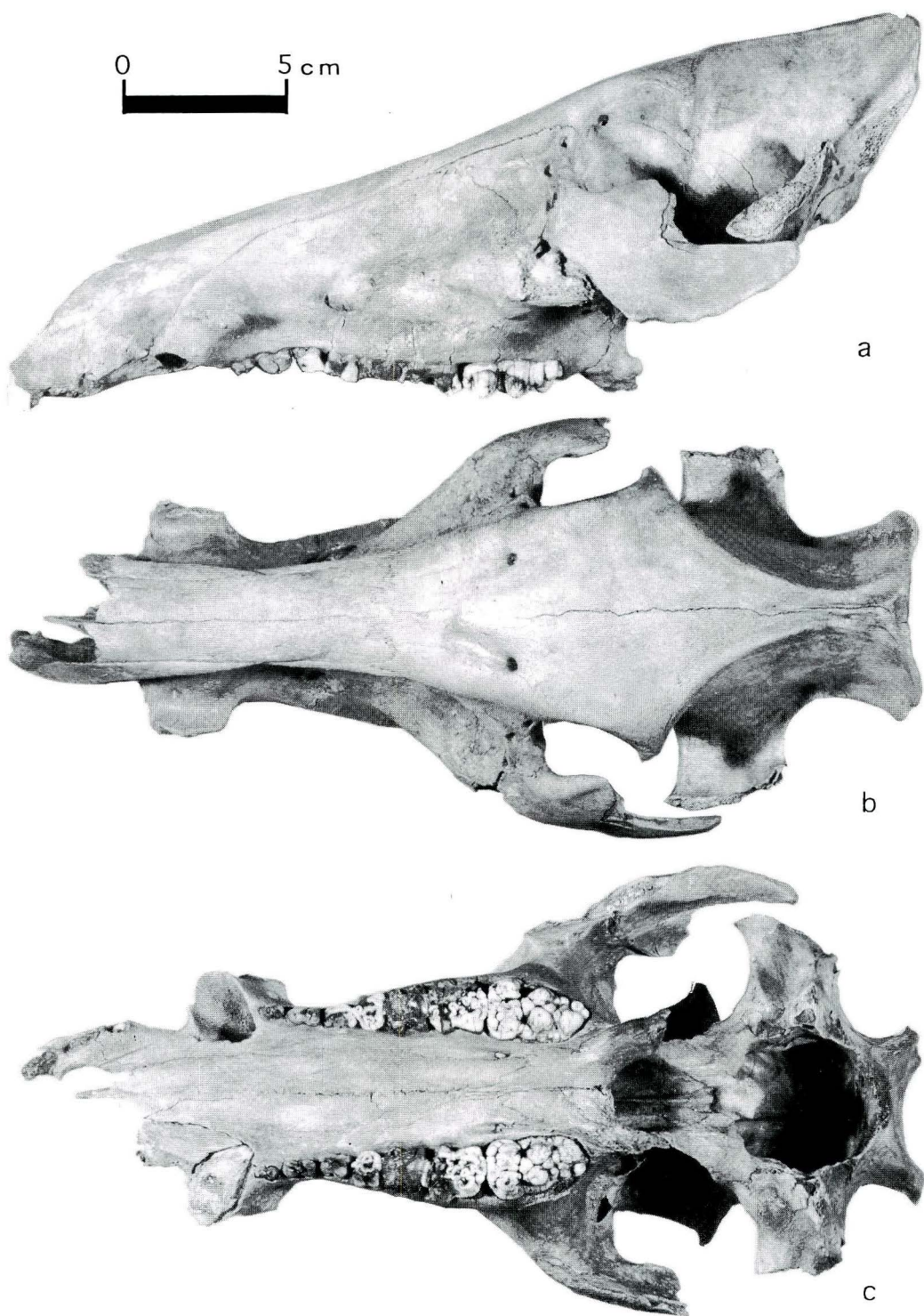


図2. *Sus scrofa leucomystax* TEMMINCK 頭蓋骨. a: 左側面; b: 背側面; c: 腹側面.

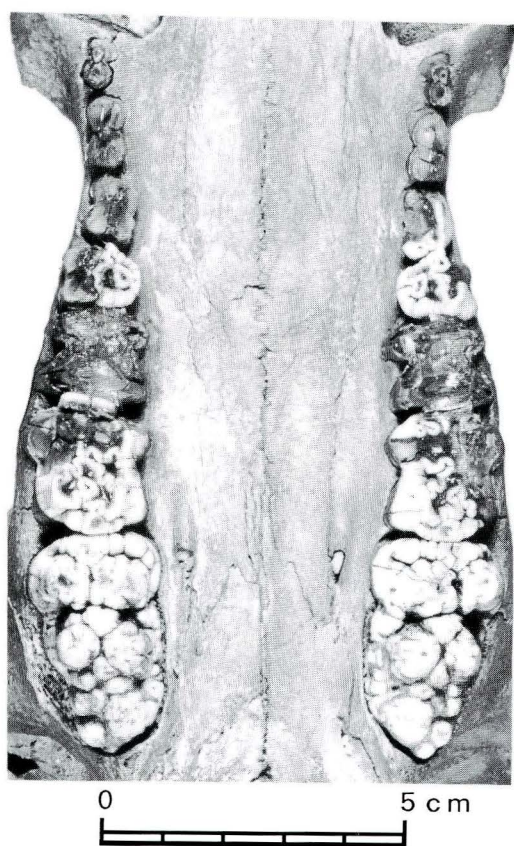


図3. *Sus scrofa leucomystax* TEMMINCK
頬歯の咬合面.

とんど差がなく、磯子標本と久里浜標本とでは相違はあるが、種または亜種の違いを表すものではないと考えられる。よって、これらの化石標本はどちらも *S. scrofa leucomystax* であると同定した。

文 献

- DERIESCH, A., 1976. A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites. *Peabody Mus. Bull.*, (1): i-ix+1-137.
- 蟹江康光・木越邦彦, 1986. 横須賀市久里浜湾口産イノシシ化石の¹⁴C年代. 横須賀市博物館報, (33): 3.
- 松島義章, 1979. 南関東における縄文海進に伴う貝類群集の変遷. 第四紀研究, 17 (4): 243-265.

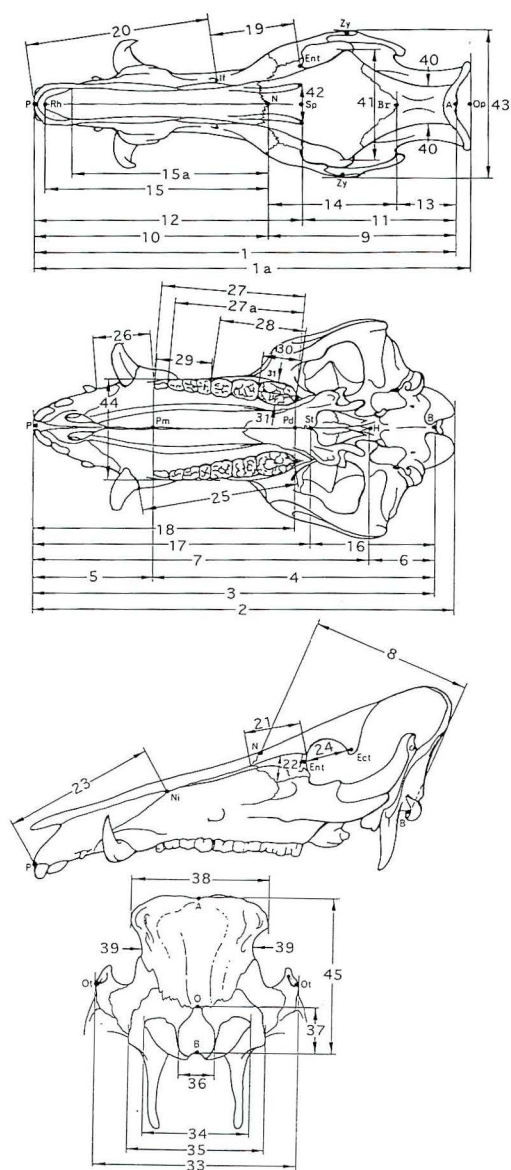


図4. 計測部位. (DERIESCH, 1976より抜粋.)

- SHIKAMA, T. and Y. HASEGAWA, 1965. Fossil Suid from Kurihama, Kanagawa, *Sci. Rept. Yokohama National Univ. Sec. 2*, (12): 37-43, pls. 2-3.
(神奈川県立博物館)